

# 京都部落問題 研究資料センター通信

第59号

発行日 2020年4月25日（年4回発行）

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

## 2020年度 差別の歴史を考える連続講座

第1回 10月2日（金）

幕末の洪水対策と被差別民

—近年、解読が進む「今村家文書」から—

講師：小林 ひろみさん（奈良県文化資源活用課臨時職員）

第2回 10月9日（金）

朝鮮通信使と「あの」絵図

講師：伊東 宗裕さん（佛教大学非常勤講師）

第3回 10月16日（金）

健常者とは誰か —「耳なし芳一」を読み解く—

講師：広瀬 浩二郎さん（国立民族学博物館准教授）

第4回 10月29日（木）

神輿場はなぜ荒れたのか —近代京都の祇園祭神輿渡御を中心に—

講師：中西 仁さん（立命館大学教員）

第5回 11月6日（金）

全国水平社創立前の「差別糾弾闘争」—京都・東七条の経験から—

講師：朝治 武さん（大阪人権博物館館長）

第6回 11月13日（金）

近代京都の被差別部落と在日朝鮮人 —土木事業を中心に—

講師：高野 昭雄さん（大阪大谷大学教授）

\* \* \* \* \*

時 間：午後6時30分～午後8時30分

場 所：京都府部落解放センター4階ホール 参加費：無料

◇日程変更の場合がありますので、参加ご希望の方は必ず連絡先を明記の上、前日までにFAX・電子メールでご連絡ください。

本の紹介

『時代に抗する―ある「活動家」の戦後期』

(杉本昭典著、市田良彦・黒川伊織編集)

『杉本昭典と尼崎の政治・労働運動』

(杉本昭典著、前田裕昭監修、江藤正修・広畑貞昭聞き手・記録)

谷合佳代子

(公益財団法人大阪社会運動協会エル・ライブラリー  
〈大阪産業労働資料館〉館長)

◆尼崎で活動した杉本昭典

今回紹介する図書二冊は、主に尼崎市に活動拠点を置いていた社会運動家、杉本昭典のオーラルヒストリーである。杉本は京都部落問題研究資料センターの前身である京都部落史研究所所長であった故・師岡佑行とも同じ尼崎で活動していた縁がある。

一冊目に紹介する『時代に抗する』は二〇一四年に私家版として発行された。同書は国立国会図書館を始め、全国の公共図書館で一冊も所蔵されていない希少本である。二〇二〇年四月現在、国内の図書館で所蔵が確認できるのは当エル・ライブラリーと同志社大学だけである。したがって、紹介してもほとんどの読者が同書を読めないというおそれがある。

また、同書の記述は主に日本共産党五〇年分裂時代を中心とし、

その後についてはほぼ言及がない。そこでもう一冊、同書刊行の翌年に発行された『杉本昭典と尼崎の政治・労働運動』と合わせて取り上げることとした。

まずは杉本昭典の略歴を『時代に抗する』奥付から引用しよう。

「一九二八年生まれ。四五年兵庫県立尼崎工業学校卒業後、住友電気工業入社。四六年大同製鋼(五〇年に大同鋼板として新発足、現在の日鉄住金鋼板)に入社して組合運動を担いつつ、日本共産党に入党。五〇年レッドページにより職場を追われ、以降は党の「経営工作者」として労働運動を支えた。六一年日本共産党を離れ、社会主義革新運動(社革)で活動。尼崎の労働運

動・医療生協運動を長く支えている」

このように、杉本は若くして労働運動・政治運動にかかわり、生涯を社会運動に捧げてきたと言っても過言ではない。

◆本書の構成

では、本書の目次を見てみよう。

杉本昭典インタビュー

- 1 一七歳の共産党員
- 2 軍国少年の時代
- 3 呉の志願水兵
- 4 労働組合を知る―戦後の混乱期
- 5 党と労働組合の軋み―扶桑摘発闘争、阪神教育闘争
- 6 五〇年分裂へ
- 7 国際派の迷走と党への「復帰」―「Y」の時代
- 8 軍事路線の党と労働者解放同盟

あとがき

解題 尼崎における日本共産党「五〇年分裂」の展開 黒川伊織

以上のように本書は杉本の口述から成り、その編集は神戸大学の市田良彦教授が行った。インタビューに答えて語った杉本の口述に相当

な手が加えられて、一人語りの読みやすい文章に変えられている。

末尾に付された黒川伊織(神戸大学協力研究員)の解題が時代背景の理解に大いに役立つが、その内容に踏み込む前にまずは杉本のインタビューを概観しよう。

◆一七歳で共産党員に

杉本は戦後まもなく一七歳で労働組合に加入し、ほどなくして日本共産党員となる(規定では入党条件は一八歳以上)。若くして尼崎地方の重要な活動家となった杉本が、ユーモアを交えつつ饒舌に語られていく。戦前の軍国少年時代の思い出も細部にわたり記憶が鮮明で、インタビュー当時八五歳を超えていた杉本の記憶力のよさには驚かされる。

組合運動と共産党員としての活動の板挟みとなっていく様子も生々しい。共産党は戦後の再建当時、徳田球一委員長の指導下、官僚的で硬直した指導体制を敷いていた。労働現場の現実を無視した居高高で抽象的な指令が上から降りてくる。上意下達機関と化した共産党の末端で青年杉本が苦闘した様子が語られる。

やがて迎えるレッドページと五

〇年分裂の数年前から、既に共産党内部では対立の兆しが見えていたという。感心するのは、当時まだ二十歳そこそこの杉本が党の幹部に向かつて物おじせず発言している様子である。

一九五〇年六月、共産党幹部がレッドパージによって公職追放となり、中央指導部が地下に潜ると同時に「所感派」（主流派）と「国際派」（反主流派）に分裂し、杉本は国際派に属することとなる。尼崎では国際派が共産党阪神地区委員会を名乗った。

#### ◆師岡佑行について

本稿で共産党の五〇年分裂の経過を詳述する余裕はないので省くが、本書ではこのくだりで師岡佑行が登場する。杉本自身の言葉で語ってもらおう。

「住友鋼管にビラ撒きに行ったとき、橋の片方で国際派、もう片方で所感派が撒いているなんてことがありました。そこへ警察がガアと来よる。察知した僕らは「逃げい！」となって、バアーと労働者にまぎれて逃げた。そしてら所感派のほうに逃げ遅れて捕まりよったんです。師岡（佑行）君はそれで大久保刑務所行き（昭和二六

〇一九五一年一〇月、政令第三二五号違反で逮捕）。」（五八頁）

また、黒川伊織の「解題」中にも師岡の名前が挙げられている。

「当時尼崎で活動していた師岡佑行は「朝連長洲支部の事務所が細胞事務所を兼ね」ており、細胞のメンバーは朝鮮人のほうが多くなつたと述懐している」（二〇〇頁）

「師岡の現行犯逮捕は分裂が収束したのちの五一年一〇月のことであるが「中略」、この時、逮捕された師岡および朝鮮人男性の即時釈放を求める朝鮮人・日本人六〇名が尼崎東警察署に押しかけ、逮捕者も出た」（二二七頁）

師岡について少し補足しよう。杉本昭典と同じく一九二八年生まれの師岡佑行は、尼崎で代用教員として働いていた一九四九年にレッドパージにより解職された。この時、尼崎の教職員は四人がページされたという（本書「解題」一一二頁）。その後、一九五一年、朝鮮戦争反対ビラを撒布中に逮捕されている。杉本の証言はこのときのビラ撒きの様子を語ったものである。師岡は所感派であったと読めるくだけであるが、実際はどうだったのかは不明だ。

杉本の活動歴やその思想を知る

につれ、「国際派」「所感派」といったレッテル貼りがいかに無意味か痛感させられる。杉本は派閥の一員としての動きよりも、組合に根付いた、そして地域に根付いた活動に何よりも心血を注いでいたことが見て取れる。同じく師岡が所感派だったのかどうかは実はどうでもよいことではなからうか。派閥にこだわるのは党中央そのものであり、幹部について研究している人々であろう。

いずれにしても、戦後の尼崎において、師岡と杉本は共に激動の時代の共産党員として青春を党活動に捧げたのである（師岡の伝記事項については「京都部落問題研究資料センター通信」第四号、二〇〇六年七月、を参照した）。

#### ◆五〇年分裂から軍事路線時代へ

杉本は何度も党の硬直した指令に反抗した様子を語っている。そして、五〇年分裂時代の複雑な内部対立が後々までさまざまところで尾を引いたことも述べているが、国際派が強かった尼崎ではページされた共産党員が工場でのビラ撒きを許されていたというように、排除よりも共闘の気運が高かったことが多くのエピソードで証言さ

れている。

この時期に杉本は二度、共産党を除名されている。一度目は五〇年末で、その後いったん分裂が収束した五一年九月に復党したが、火災瓶闘争などの軍事路線に同調しない杉本は、上層部から疎まれていく。

杉本は共産党中央が地下に潜っていた時代の「裏組織」によって引き起こされた不祥事の一つである「糞爆弾」事件の後始末も負わされた。これは尼崎製鋼労組の平坂春雄の新婚宅に党の裏組織が糞尿を投げ入れた事件を差す。軍事路線に走っていた党が、平坂を「生ぬるい社民勢力」と見なして嫌がらせを行ったのである。

この後始末のくだりといい、杉本が常に共産党の暴走を止める立場で腐心していたことが読みとれる。この後、五三年に再び杉本は除名される。五五年の六全協で復党するが、安保闘争を経て六一年に最終的に党を離れることとなる。この共産党五〇年分裂問題は非常に複雑で、その後の火災瓶闘争、山村工作隊、中核自衛隊といった軍事路線の展開と党内の混乱については理解が難しい。読者にはぜひ黒川伊織の解題を参考にされた

い。この解題はよく整理されていて、時代背景を丹念に追った研究論文としての価値が高い。本書は最初に黒川の解題を読んだから杉本のインタビューを読むほうが理解が進むかもしれない。

#### ◆本書発刊の経緯

本書中には発刊に至った経緯が書かれていないため、本書を編集した市田良彦並びに解題を執筆した黒川伊織へ筆者のインタビューによって把握できたことをここに記す（二〇二〇年四月一四日、電話にて）。

構成・編集を担当した市田良彦は、旧知の間柄であった社会運動資料センターの由井格から送られてきた「関西活動者会議」の手書きの議事録がインタビューの発端であると語る。「これは面白い」と直感したとはいえ、その資料は既に不二出版からマイクロフィルムで刊行されていた『戦後日本共産党関係資料』に収録されているものであることが判明した。さらに、その資料だけではなんともしがたいものがあつたので、杉本人へのインタビューが必要と考え、旧知の前田裕晤に杉本を紹介してもらったのが本書発行の端緒であ

るといふ（後述の『杉本昭典と尼崎の政治・労働運動』に前田が書いている後書きとは若干の齟齬がある）。

市田が杉本のインタビューを文字起こししてかなりの編集を施し、用語解説については黒川・市田が分担（ほぼ黒川が執筆）し、解説については市田が黒川に依頼した。

印刷部数は五〇〇で、費用を払った杉本がほとんどを引き取った。冒頭に述べたように本書は書店で入手できず、当エル・ライブラリーで若干部数の販売を行っていた（黒川は二〇一六年度よりエル・ライブラリーの特別研究員を兼ねる）。問い合わせの電話を受けた筆者はその多くがシニア世代の男性であることを実感した。戦後から一九七〇年代ごろにかけての社会運動の経験者であろうか。

#### ◆続編の刊行

黒川伊織によれば、「杉本さんは六全協までで本の記述は止めてほしいと言った。また当事者が生きていて、迷惑がかかる話もあるので」とのことである。

しかし、六全協で記述が終わっていたことにあきたらない思いをもった前田裕晤は、『時代に抗する』出版記念会の翌日には続編の

刊行のために杉本へのインタビューを開始している。

こうして一年半後に上梓されたのが、『杉本昭典と尼崎の政治・労働運動』である。その編纂過程については「はじめに」で次のように書かれている。

「六全協後については、江藤正修が聞き取り、前田裕晤、広畑貞昭が校閲を繰り返し、作成に至った」

ここで前田裕晤について紹介しよう。前田は一九三四年生まれで、全電通大阪中電支部執行委員を経て一九八九年全労協（全国労働組合連絡協議会）結成に参画した。「解説と後書き」で自らを杉本ら尼崎の活動家の「手駒」であったと敬愛を込めて述べている。

次に本書の目次を掲載する。

はじめに	第一章 軍国少年・杉本昭典
第二章 戦後混乱期の中からの再出発	第三章 党活動と労働組合運動に専念する若き青年
第四章 党内亀裂が深化した五〇年問題	第五章 軍事路線（Y）と混乱する国際派

第六章 労働者解放同盟

第七章 五〇年問題（補遺）―軍事路線と大衆運動の狭間

第八章 六全協と党内外の間人模様

第九章 六〇年安保闘争と共産党との決別

第一〇章 尼崎にこだわった左翼

結集

第十一章 旗幟を鮮明に、市議選

第一二章 左翼の総結集と三里塚

闘争

第一三章 右翼労働運動再編に抗

して

解説と後書き

本書のうち、第一章から第六章

まではほぼ『時代に抗する』からの転載である。本書冒頭に「編者の

了解を得て、引用させていた

「とあるが、引用部分と前田

が執筆したと思われる地の文との

区別がわかりにくく、出版の在り

方としていささか問題がある。

とはいえ、杉本の証言の合間の

随所に前田の解説が加わるため、

全体の流れはつかみやすい。

の内容が紹介されていて、興味深い。これは六全協後の一九五五年九月に党中央から宮本顕治、志田重男、志賀義雄が来西し、自己批判を開陳した会議である。議事録によれば、冒頭、杉本が発言し、分裂が收拾されたはずなのに、除名された幹部・西川彦義が出席していないことを追及している。

#### ◆杉本・前田・江藤の鼎談

本書のオリジナル部分である第七章から内容を見ていこう。

第七章から第一〇章は杉本・前田・江藤の鼎談形式をとる。前田と江藤正修が杉本に質問し、杉本が答えるのだが、全体としては仲間内のおしゃべりのような雰囲気がある。あまりに多くの人名が登場するため、その人脈に通じていない読者には読みづらいだろう。

また、質問と応答がすれ違ったり脱線したり、文脈を読み取りにくい箇所も随所があり、オーラルヒストリーならではの臨場感と読み取りづらさが同居している。

第七章で前田裕晤は杉本に対して、五〇年分裂問題をさらに深堀りして尋ねている。すなわち、軍事路線を担った「中核自衛隊」、コードネーム「Y」と呼ばれた部

隊の指揮系統がどうなっていたのかを尋ねているのだが、杉本は「その点はよく知らされていない」と答えている。だが、スキヤンダルも含めた裏話はいくつも答えている。『時代に抗する』で既に語られていることも含めて、生々しく具体的だ。

第八章では「隠れ党员」としてしばしば筆者も耳にする高野実についての証言から始まる。一九五五年の共産党六全協前後の人間関係の整理を、と前田が振ったところ、江藤が高野実について質問し、そこから高野実がいつまで党员だったのかという話題でひとしきり三人は盛り上がる。

その結論めいたこととして杉本は「政治運動といつても人間関係はなかなか切れないもんや」と感慨深げである。

この章では、共産党人脈のなかにかに実業家が多かったかという話が展開する。実名が次々と出てくるうちで、筆者にとつてとりわけ興味深かったのは南海電鉄社長だった川勝伝が三里塚芝山連合空港反対同盟委員長・戸村一作の選挙運動のためにカンパしたというくだりである。そのほかにも、知らなかった「事実」が次々と語ら

れていくのには驚きを禁じ得ない。ただし、これらの語りの裏付けはまったくないので、引用する場合には文献との照合が必要となるだろう。

第九章は共産党除名を経て「社会主義革新運動」（社革新）へと至る経緯が語られる。

六〇年安保闘争における党の指導に疑問を持っていた杉本は、さらに六一年三月、新しい党綱領の学習のためのパンフレットを尼崎地区委員会名で独自に発行したことが問題視されて（「黄色いパンフレット事件」）、七月には最後の除名となる三度目の処分を受ける。事実と異なる捏造キャンペーンにより「反党分子」のレッテルを貼られていく様子も生々しい。

六一年九月、大阪の大森誠人や小森春雄、沖浦和光らと「社会主義労働者協会」を結成し、関西本部の代表には山田六左衛門が、阪神地区委員長には杉本昭典が就いた。

その組織は一〇月には社革新へとかわり、その時点で阪神地区の指導部の一人に師岡佑行の名が挙げられている。

#### ◆尼崎の左翼結集と師岡佑行

一九六一年一〇月に生まれた社革新は早くも翌年二月にはジリ貧状態となる。

第一〇章では四分五裂となる左翼陣営について語られるが、今以上に多くの個人名と組織名が登場するため、いよいよ読者も混乱の極みとなるか、面白過ぎて前のめりになるかの瀬戸際に立たされるだろう。

この時期に杉本は師岡佑行宅で前田裕晤と初めて出会ったという。前田はこの対談を通じて杉本から初めて知らされた事実もあり、「杉本さんが裏で仕組んでいたとは知らなかった」と言い、杉本は「裏で仕組んだわけじゃないけどな：「中略」俺が最初にあんたに会ったのは、師岡さんの家や。そこで紹介されて、それからずっと一緒にやっとなったやないか。因縁やと思ってくれ」と返しているのも微笑ましい。

尼崎では共産党に対抗して診療所設立運動が立ち上げられ、社会党も資金援助して一九六二年一月に「第一診療所」が開所する。その過程で尼崎の左翼と京都の学生をつないだのも師岡であった。

師岡と前田は立命館大学の奈良本辰也ゼミで一緒だったという縁

があり、師岡の繋いだ縁が杉本まで届き、現在に至るわけだ。「師岡さんの影響力は大きかったと思ふよ」と前田が述べている。

この鼎談に登場する多くの人名を見るにつけ、運動も結局のところは人と人のつながりが大きいのだということを感じする。理論よりもイデオロギーよりも人脈が大きな影響を及ぼしていたのではないだろうか。特に尼崎や関西の運動ではその気風が強かったように読み取れる。

#### ◆一九六二年以降の杉本昭典

第一章以降は杉本の直接の証言はほぼ鳴りを潜め、その叙述は杉本の動きを中心としつつも前田裕悟の体験記と混然一体となっている。

杉本たちが新しく組織した社革新は資金難となつて事務所を閉めることになり、六三年から一年半、杉本は失業者として苦勞することとなる。失対労働者を経て一九六四年には経歴を隠して昭和化工に入社した。以後、組合活動に復帰し、八八年の定年まで勤めあげ、最後の一二年間は組合委員長を務めた。

一九六四年以降の杉本の歩みも

また、尼崎における社会・労働・政治運動と密接にかかわっていたことが述べられている。杉本がかかわった団体や運動は数多く、そのうちの主要なものを挙げると、阪神地区社会主義研究会、労働運動活動者会議、阪神医療生活協同組合、阪神現代社などである。本書一章から三章ではその間の経過が前田の回想と共に語られる。本書が刊行された二〇一五年の時点で杉本は八七歳を超えていたが、それでもJR尼崎駅前の公園で開かれた戦争法案反対尼崎集会で杉本が賛同人の一人として発言していることを伝えている。

#### ◆残された資料のゆくえ

本書に登場する多くの人々が所蔵していた資料について、その行方が判明している限りについてここで述べる。

杉本昭典所蔵資料は尼崎市立地域研究史料館が受贈した。目録は採録済みで、メタデータについては同館のWebサイトで確認できる。

その他、この二冊の図書に登場する以下の個人・団体の資料は当エル・ライブラリーに寄贈された。現在鋭意目録採取中である。その完成には相当な時間が必要であり、

すべての資料が閲覧可能になるまでには今後十数年が必要かもしれない。

- ・和田喜太郎旧蔵資料
- ・平坂春雄寄贈資料
- ・阪神現代社寄贈資料
- ・赤本忠司寄贈資料
- ・前田裕悟旧蔵資料

エル・ライブラリーは寄付とボランティアによって支えられる民間の資料館である。二〇〇八年に就任した橋下徹大阪府知事の「委託している府の労働図書館廃止、法人資料室への補助金全廃」という「財政再建策」により、当法人（大阪社会運動協会）は危機的状況に陥った。大阪府の労働図書館を受託運営し、八年間で利用者を四倍に増やすという成果を生んだにも関わらず、図書館は廃止され、法人への補助金は全廃された。そこで、法人資料室が所蔵していた貴重な一次資料を次世代に伝えるため、新たに設置した図書館がエル・ライブラリーである。その運営は役員が身銭を切り、市民と労組・企業が寄付することによって支えている。スタッフの多くがボランティアである。

二〇〇八年以来、非常に厳しい運営が続いているエル・ライブラ

リーではあるが、スタッフの意気は軒高であり、今後とも資料館の運営を続けていく所存である。入居するエル・おおさか（大阪府立労働センター）の家賃をこの十年間で二倍以上に値上げされるといふ大阪府の非道のしうちを受けているということもあり、多くの皆様のご支援をお願いしたい。（文中敬称略）

（『時代に抗する』航思社刊、二〇一四年）  
（『杉本昭典と尼崎の政治・労働運動』鹿砦社刊、二〇一五年、一三八〇頁）

#### ※※※※※

エル・ライブラリー（大阪産業労働資料館）サポート会員募集中

◎大阪市中央区北浜東3-14  
エル・おおさか（大阪府立労働センター）4階

◎年会費一口5千円で、資料の貸出可能

◎会員は勉強会のための夜間貸し切り利用が可能

◎会費は税額控除の対象  
◎その他、詳細はWebサイト参照

原実秀／「差別はいけない」と言える子どもに 西山恵美  
本の紹介 朝鮮大学校政治経済学部法律学科創設20周年  
記念誌刊行委員会編著『今、在日朝鮮人の人権は一若手  
法律家による現場からの実践レポート』 川瀬俊治  
西成で学び合う 上 黒川優子  
部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 40 第4部  
江戸時代と明治初期の部落問題 第3章 「賤民廃止令」  
の体質 川元祥一

**部落解放研究 26** (広島部落解放研究所刊, 2019. 12) :  
1,000円

バラモン仏教批判 1・2 正木峯夫  
私の同和行政史と今後の課題と方向 藤井哲朗  
被差別部落の成立と資本主義—彼らはどのように被差別  
部落民になったのか 小早川明良  
いま、マイノリティを生きるとは 崔博憲  
国家資本主義経済の周辺史に関する移住民の生活史から  
の再考 中田英樹  
転向と非転向の間—権力と主体と思想 青木秀男  
歴史資料 解説 三浦昇一と論文「福山市未解放部落の實  
態」と『初心生涯』について 小早川明良

**部落解放研究 212** (部落解放・人権研究所刊, 2020. 3) :  
2,000円

特集 朝鮮衡平運動史の研究 3  
衡平社運動の射程—植民地支配からの解放をめぐって  
駒井忠之／日朝被差別民の提携模索とその意義と限界—  
「階級闘争論」の陥穽 八箇亮仁／衡平社と天道教 成周  
絃／慶尚北道地域の衡平運動と社会運動団体の対応 金  
日洙  
インターネット上における部落差別等投稿に関する分析  
松村元樹

「反ジプシー主義の差別思想」というレッテル貼りを排  
して—金子マーティン『部落解放研究』第210号 (2019  
年3月) 掲載論文に答える 水谷驍

**部落解放研究くまもと 79** (熊本県部落解放研究会刊,  
2020. 3)

特集「閉じ込められた命」～ハンセン病元患者とその家  
族の経験から～ 黄光男  
災害と被差別民—部落史から災害を考える— 矢野治世美  
赤き黄土—地平からの告発 来民開拓団の真相に学ぶ 吉  
田文男

**部落問題研究 231** (部落問題研究所刊, 2020. 2) : 1,0  
58円

小特集 巨大都市近郊における地域政治構造の歴史的研  
究—その課題と方法

戦後のデモクラシーを地域社会からどのように議論する  
か 源川真希／地域における「戦後民主主義」の成長と  
社会運動 森下徹／戦後地域における「デモクラシー」  
研究の課題と方法 鬼嶋淳

人権教育をめぐる動向と道德教育 梅田修  
生活保護法・墓地埋葬法・旅行病人及旅行死亡人取扱法  
の関係について 鈴木忠義  
部落問題研究バックナンバー

**リベラシオン 176** (福岡県人権研究所刊, 2019. 12) :  
1,000円

田中松月の全国水平社創立大会への参加について 上杉  
聰・外川正明  
民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 36 「ひえもんと  
り」の周辺 3 石瀧豊美

**リベラシオン 177** (福岡県人権研究所刊, 2020. 3) : 1,  
000円

中村哲君を偲んで—貴方の遺業は世界 (記憶) 遺産、ノー  
ベル平和賞を超える!— 中村元氣  
認知症ケアの新しい実践—世界で初めてのユマニチャー  
ド・シティ福岡— 本田美和子

明治23年の感染症流行と部落問題について—福岡市を事  
例に— 関儀久

図書紹介 金森修著『病魔という悪の物語—チフスのメ  
アリー』 田中美帆

思い出すままに—同和教育とハンセン病の父から学んだ  
こと— 林力

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 37 「ひえもんと  
り」の周辺 4 石瀧豊美

間違ったものさしを糺すこと～「色覚特性」から考える  
～ 桑野真一

解放教育実践者・研究者川向秀武氏のライフストーリー  
1 —幼少時期から定時制高等学校期— 板山勝樹

解放歌作詞者・柴田啓蔵の年譜、業績目録の掲載にあたっ  
て 柴田啓蔵プロジェクト (森山沾一・和智俊幸・横田  
司)

書評 初期社会主義研究会『初期社会主義研究』第28号  
特集<マイノリティ>と<差別> 新田進

**和歌山研究所通信 67** (和歌山人権研究所刊, 2020. 1)

西光万吉と非暴力主義 加藤昌彦

- 『竹田の歴史』14 中川正照  
**地域と人権京都 808** (京都地域人権運動連合会刊, 2020.3.1) : 150円  
 『竹田の歴史』15 中川正照  
**地域と人権京都 809** (京都地域人権運動連合会刊, 2020.3.15) : 150円  
 『竹田の歴史』16 中川正照  
**であい 693** (全国人権教育研究協議会刊, 2019.12) : 160円  
 人権文化を拓く 265 「わし、きっと生き抜くで！」～熊夫の決意—未完の『橋のない川』第八部の結末を言い遣いた住井すゑさん— 荒巻裕  
**であい 694** (全国人権教育研究協議会刊, 2020.1) : 160円  
 人権文化を拓く 265 「人権」と「教育」のもつれ 桜井智恵子  
**であい 695** (全国人権教育研究協議会刊, 2020.2) : 160円  
 人権文化を拓く 266 今、新たに人権教育の意義と可能性を見つめて 濱元伸彦  
**ヒューマンJournal 231** (自由同和会中央本部刊, 2019.12) : 500円  
 新しい部落史 1—過去のものとなった近世政治起源説 灘本昌久  
**ヒューマンライツ 382** (部落解放・人権研究所刊, 2020.1) : 500円  
 特集 リクナビ問題と私たちの個人情報  
 報告 「マスコミ人権懇話会」メディアにおける部落問題の情報発信について考える 編集部  
 書評 志水宏吉・島善信編著『未来を創る人権教育—大阪・松原発 学校と地域をつなぐ実践』 原田琢也  
**ヒューマンライツ 383** (部落解放・人権研究所刊, 2020.2) : 500円  
 特集 困難を抱えた女性への支援  
 わたしの視点—メディアの現場から 47 「部落」と向き合う 野田淳平  
 部落解放運動のこれから—引き継ぎそして変革へ 部落問題は誰の問題なのか 綾田直樹  
**ヒューマンライツ 384** (部落解放・人権研究所刊, 2020.3) : 550円  
 特集 ハンセン病家族訴訟—私たちに問われているもの 部落解放運動のこれから—引き継ぎそして変革へ 5 私と解放運動 原和也  
 明日をかえる法人—新たな人権への取り組み 41 人権と出会う日田の町づくりをめざす NPO法人ひた人権研究センターの取り組み「部落問題を語り合う」 渡邊茂則  
**ひょうご部落解放 174** (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2019.9) : 700円  
 特集 メディアと人権  
 本の紹介  
 朝治武著『韓国歴史ドラマの再発見—可視化される身分と白丁』 高吉美/李民花作画, 張守基脚本『虹の軌跡—漫画で読む4.24教育闘争』 高祐二  
**部落解放 783** (解放出版社刊, 2020.1) : 600円  
 特集 日本の移民政策を問う  
 人権社会めざす報道・啓発に尽くす 平野一郎さんをしのぶ 中川健一  
**部落解放 784** (解放出版社刊, 2020.1) : 1,000円  
 第50回部落解放・人権夏期講座報告書  
**部落解放 785** (解放出版社刊, 2020.2) : 600円  
 特集 部落問題のいま—2020年  
 拡散するネガティブ情報と収斂させてはいけない学びの機会 松村元樹/部落問題を知らない部落の子どもと運動の課題 北川真児/ルーツとアイデンティティ 同和・人権教育の視点から 阿久澤麻理子/座談会 それぞれの立場から部落問題とかかわること 杉本大輔, 中谷実樹, 矢野淳士, 齋藤直子  
 本の紹介 志水宏吉・島善信編著『未来を創る人権教育—大阪・松原発 学校と地域をつなぐ実践』 土田光子  
 部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 39 第4部 江戸時代と明治初期の部落問題 第2章 江戸時代の身分と社会的分業 川元祥一  
**部落解放 786** (解放出版社刊, 2020.2) : 1,000円  
 部落解放研究第53回全国集会報告書  
**部落解放 787** (解放出版社刊, 2020.3) : 600円  
 特集 国際連合 人権キホンのキ  
 本の紹介 中村一成『映画でみる移民/難民/レイシズム』 西村寿子  
 没後50年—西光万吉から学ぶ 西光万吉没後50年記念座談会 加藤昌彦, 日野範之, 飯田敬文, 小笠原正仁  
**部落解放 788** (解放出版社刊, 2020.4) : 600円  
 特集 部落問題と向き合う若者たち 8  
 はじめに 内田龍史/当事者性抜きに部落問題は語れない 衣笠尚貴/地域とのつながりはずっとつづくもの 米



- 語る・かたる・トーク 299** (横浜国際人権センター刊, 2020.1) : 550円  
語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う  
「無免許運転は、違法です」 吉成タダシ
- 語る・かたる・トーク 300** (横浜国際人権センター刊, 2020.2) : 550円  
語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う  
「肚があるのか、ないのか」 吉成タダシ
- かわとはきもの 190** (東京都立皮革技術センター台東支部刊, 2019.12)  
靴の歴史散歩 135 稲川貴  
皮革関連統計資料
- グローブ 100** (世界人権問題研究センター刊, 2020.1)  
妙法院の新地開発と「今村家文書」 平野寿則  
「グローブ」目次 (第79号～第99号)
- 芸備近現代史研究 4** (芸備近現代史研究会刊, 2020.1)  
広島県水平社解放連盟の活動家たち 割石忠典  
堀川俊市と山本宣治との出会いについて—1925年の歴史的な瞬間を探る—研究に向けて 今岡順二  
写真にみる近現代史 2 在日朝鮮人の帰還事業 編集委員会  
狭山差別裁判糾弾闘争と私 藤本誠二
- 国際人権ひろば 149** (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2020.1) : 350円  
特集 外国人技能実習制度をめぐる「ビジネスと人権」の課題
- 国際人権ひろば 150** (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2020.3) : 350円  
特集 日本と台湾の子どもの権利
- 試行社通信 401** (八木晃介刊, 2020.3)  
亡き人との実存協同 6 野間宏さん
- 初期社会主義研究 28** (初期社会主義研究会刊, 2019.11) : 3,000円  
特集 <マイノリティ>と<差別>  
高木頭明の被差別部落観の変遷 上山慧 / 「人間は尊敬すべきものだ」という思想—ゴースト『どん底』の受容と全国水平社の創立— 関口寛 / 被差別部落青年・田原春次の“闘争宣言書” 紹介—堺利彦農民労働学校の周辺 5 小正路淑泰
- 人権と部落問題 931** (部落問題研究所刊, 2020.1) : 600円  
特集 人権の尊重こそスポーツの原点  
文芸の散歩道 近世文芸に著された賤民—『異本 翁草』より— 小原亨  
ごった煮人生をふり返って 20 続・中学校の生活 成澤榮壽
- 人権と部落問題 932** (部落問題研究所刊, 2020.2) : 600円  
特集 「アイヌ施策推進法」の検証  
文芸の散歩道 障害者テロル—辺見庸『月』 福地秀雄  
第57回部落問題研究者全国集会の報告
- 人権と部落問題 933** (部落問題研究所刊, 2020.3) : 600円  
特集 自治体の「人権意識調査」の検証  
文芸の散歩道 福地桜痴作『侠客春雨傘』の種本—『当世武野俗談』の「大口屋治兵衛」— 秦重雄  
ごった煮人生をふり返って 21 高校生時代の生活 成澤榮壽  
2019年度『人権と部落問題』総目次 (922号～933号)
- じんけん ぶんか まちづくり 66** (とよなか人権文化まちづくり協会刊, 2020.1)  
関電金品受領問題と部落問題を考える 佐佐木寛治
- 振興会通信 150** (同和教育振興会刊, 2020.1)  
同朋運動史の窓 56 左右田昌幸
- 信州農村開発史研究所報 149・150号** (信州農村開発史研究所刊, 2019.12)  
八重原村の被差別部落の歴史 8 柳沢恵二  
史料紹介 柳沢家より「島原噴火史料」を借用 斎藤洋一
- 崇仁～ひと・まち・れきし～ 9** (崇仁発信実行委員会刊, 2020.3)  
特集 崇仁小学校に想いを寄せて
- 地域と人権 1206** (全国地域人権運動総連合刊, 2020.3.15) : 147円  
NHK番組「バリバラ」偏った一面的「部落」の報道
- 地域と人権京都 804** (京都地域人権運動連合会刊, 2020.1.1) : 150円  
『竹田の歴史』11 中川正照
- 地域と人権京都 805** (京都地域人権運動連合会刊, 2020.1.15) : 150円  
『竹田の歴史』12 中川正照
- 地域と人権京都 806** (京都地域人権運動連合会刊, 2020.2.1) : 150円  
『竹田の歴史』13 中川正照
- 地域と人権京都 807** (京都地域人権運動連合会刊, 2020.2.15) : 150円

# 収集逐次刊行物目次 (2020年1月～3月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

**愛生 823** (長島愛生園長講会刊, 2020. 2)

神谷美恵子の蔵書目録について 藤原理沙

**IMADR通信 201** (反差別国際運動刊, 2020. 2)

特集 北京会議+25

**ウィングスきょうと 156** (京都市男女共同参画推進協会刊, 2020. 2)

図書情報室新刊案内

アンネッテ・ヘアツォーク著『北欧に学ぶ 好きな人ができたら、どうする?』/レイチェル・ギーザ著『ボーイズ—男の子はなぜ「男らしく」育つのか—』

**解放新聞 2937** (解放新聞社刊, 2020. 1. 6) : 90円

全国水平社創立100周年に向けて 2—100年前の1920年はどんな年? 燕会が水平社の創立準備にとりかかる 駒井忠之

**解放新聞 2941** (解放新聞社刊, 2020. 2. 3) : 90円

2020年度一般運動方針 (第1次草案)

**解放新聞京都版 1175** (解放新聞社京都支局刊, 2020.

2. 10) : 70円

この人の扉 1 水間一美さん

**解放新聞京都版 1176** (解放新聞社京都支局刊, 2020.

2. 20) : 70円

この人の扉 2 水間一美さん

**解放新聞京都版 1177** (解放新聞社京都支局刊, 2020.

3. 1) : 70円

この人の扉 3 水間一美さん

**解放新聞東京版 971・972号** (解放新聞社東京支局刊,

2020. 1. 1・15) : 190円

お肉の情報館の活用を 私たちの暮らしと文化から考える 水野松男

**解放新聞東京版 973号** (解放新聞社東京支局刊, 2020.

2. 1) : 95円

食肉の授業に取り組んだ10年間 1 広沢佑

スカイツリーが立つ街～子ども達は親の労働、仕事、町をどう見ていたか～ 6 岩田明夫

**解放新聞東京版 974号** (解放新聞社東京支局刊, 2020.

2. 15) : 95円

食肉の授業に取り組んだ10年間 2 広沢佑

**解放新聞東京版 975号** (解放新聞社東京支局刊, 2020.

3. 1) : 95円

食肉の授業に取り組んだ10年間 3 広沢佑

**解放新聞東京版 976号** (解放新聞社東京支局刊, 2020.

3. 15) : 95円

職場で部落問題に取り組む 自分の人生観が変わった 1 中里保夫

**架橋 42** (鳥取市人権情報センター刊, 2020. 2)

人権資料・展示全国ネットワーク総会を鳥取市で開催  
記念講演1 鳥取藩の部落史 坂本敬司/記念講演2 「被差別体験の聞き取り調査」からみえてきたこと 坂根政代  
みんなの架橋～架橋でめぐる全国の人権機関～ 水俣病センター相思社のいま 葛西伸夫

**語る・かたる・トーク 298** (横浜国際人権センター刊,

2019. 12) : 550円

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う

「追いつかれたときこそ人権教育」 吉成タダシ

## 事務局よりお知らせ

◇「差別の歴史を考える連続講座」は例年、5・6月と10・11月の二期に分けて開催してきましたが、今年新型コロナウイルス感染拡大状況のため、1頁にありますように10月・11月に6回開催する予定です。会場も解放センター4階のホールに変更しています。是非ふるってご参加ください。尚、ご参加いただく方は必ず事前にご連絡ください。

◇みなさま、時節柄どうぞご自愛ください。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://shiryo.suishinkyokai.jp>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時 (祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分